

イエスは「神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」と言います。「神を信じる」、「イエスを信じる」は、「神は存在すると思う」とか「イエスを神の子であると考えている」ということではありません。神さまの中へ、イエスの中へ、その方を信頼し、自分の全存在を投げ入れて委ねる、という意味での「信じる」です。イエスが十字架で死に去って行くのは、弟子たちが復活させられたイエスと共に生きるようになるためです。「わたしは～である」というイエスの言葉は、この福音書に描かれるイエスに特徴的な表現です。道は人が歩くことによってできるものです。イエスは「どこそこに道があるから、その道を行きなさい」と言うのではありません。その道はイエスが歩むことによってできる道であり、その道に行くということは、イエスを信頼し、イエスと共に生きることなのです。「わたしは道である」の道は唯一の道で、これ以外の道は存在しないという意味です。ユダヤ教では律法が神さまに至る唯一の道でしたが、ヨハネ共同体はイエスこそ神さまに至る唯一の道であると語ります。人はイエスに自分を投げ入れ、イエスと共に生きるの でなければ、神さまを父として知り、父との交わりに生きるようになることはできない、という宣言なのです。そして、この道は十字架の死で終わる道ではなく、神さまのもとに行く道なのです。続いて、イエスが父に至る道であるという主張と同じことが「父を知る」という観点から言い直されます。「イエスを知ること」は「父を知ること」、「イエスを見ること」は「父を見ること」、そして「イエスは父の内」おり「父はイエスの内」におられる。ここには、イエスと父なる神さまとの一致、一体性ということが告げられています。「父である神さま」は見ることはできないはずですが、イエスを見る体験は父を見ることになるという、この福音書独自の主張を表現しています。

ユダヤ教との対決の中で、イエスが父の内におられ、父がイエスの内におられ、イエスを通して語り働いていることこそが、ヨハネ共同体の宣教の中心の一つでした。私たちは自分の力で神さまへの道を捜し求め、そこを歩いて行くのではなく、イエス自身が父に至る道を歩き、それによって私たちが父と共にあることに信頼して、道であるイエスを通して神さまへと歩んで行くのです。そのような歩みをする時に、私たちはどんな困難が迫る時にも、平安の内に歩む者とされるのです。大事なことは、私たちの心が平安であるかどうかということではなく、イエスが共にいるということ、イエスが私たちを受けとめてくださっているということです。その道が、イエスが歩んだ道であるが故に、必ず神さまのもとへと通じているからです。